

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

やなぎ みきやす  
柳 幹康

中国禅宗史上、五代十国の時代に活躍した永明延寿は禅浄一致、教禅一致を説いた人物として知られるが、その主著の『宗鏡録』は百巻にも及び、全体にわたる思想史的研究はなかった。本論文は延寿の思想が如何なる系譜の上に載り、かつ『宗鏡録』が中国仏教思想史上、どのような位置にあるのかを解明する。延寿に関する研究は既に王翠玲等が先鞭を付けていたが、本論文はそれらの研究を批判的に継承し、唐代における『楞伽経』の受容から始め、馬祖、宗密など五代に至る禅者の特徴を踏まえ、本書全体を総合的な視野に立ち考察する。

第1章では伝世資料を読み込み、先行研究の不備を補い、延寿が生涯、呉越国に活躍した僧侶であったことを明らかにする。本論文の中心は第4、5章であり、延寿に至るまでの禅宗に流れる一心理解の系譜を明らかにする。それは『楞伽経』の「自心現量」の記述に始まり、やがて馬祖の引用になる「仏語心為宗、無門為法門」という『楞伽経』にはない記述が、一心を理解する上で大きな意味を持ったと論じる。ここに心を中心に捉える伝統が生まれ、その上に『宗鏡録』や『万善同帰集』などの延寿の諸著作が存在することを明らかにする。

また、『宗鏡録』に説かれた禅浄・教禅一致の主張は、延寿に至るまでの全仏教を統合する意味を持っていたと論じる。法相や天台、華嚴などの教理的仏教が「教」、禅などの実践的仏教が「禅」、浄土教が「浄」であるが、浄は円修の一つとして位置づけられ、その三者が一心を説くものと理解される。また延寿は、表詮（肯定的表現）や遮詮（否定的表現）という宗密の用語を継承し、それらを所詮と能詮という枠組みに発展させた。この点を掘り下げた上で本論文は、表詮と遮詮を含む種々の経典は能詮、それによって表現される所詮は一心として、「教」を同列のものとして意味づけるところに本書の思想的特徴があることを詳論する。さらに『宗鏡録』が延寿没後約百年を経て再注目されたことを指摘し、後代の中国や日本において幅広く受容されたことを、その背景とともに明らかにする。

このように本論文は、『宗鏡録』が人間の心を軸に据えて唐代までの仏教を統合し、かつ宋代に橋渡しをする役割を果たし、また簡易な大蔵経として利用されたことを明らかにした。従来、儒教研究の上では、唐代と宋代の間に質的な差異があることが指摘されていたが、仏教においても同様であり、その転換点となる人物が呉越国の延寿であることを示し、中国仏教思想史上に実証的に位置づけることに成功した本論文は、きわめて意義のある研究成果として高く評価することができる。文章構成や訳語の統一に関して幾つかの問題は残されているが、本研究のすぐれた成果を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。